

## 二郎とアヒル

二郎が二高に合格し自転車通勤してはいたが、バイクの免許をとり郵便局払い下げのバイクを九百円余り小遣いで買い、バイク通学が始まった。

学校から直線距離、二キロ以上なければ、バイク通学が許されるのだそうだ。道路沿いに走れば五キロ位になるだろう。家を出て二十人町を通る、途中に小鳥屋さんがある。多くの小鳥に交じって、口癖の可愛いアヒルが、店前に出ている。毎日横目に眺めながら、通学していたが、とうとう欲しさに我慢出来ず買って来た。



風呂場で洗面器に水を張り泳がせて喜んでいた。洗面器の中を小さい足で水をかき、くるくる回る姿が何とも言えないほど可愛い。二郎は学校から帰ると真っ先に、風呂場に行く。日曜日には、人通り多い店前に出し一人悦に入っていた。

餌はよく食べる、鳩くらいに大きくなった。洗面器では小さすぎる。大きめの器を見つけ、入れ替え又楽しみ始めた。風呂

場は毎日奇麗に掃除する、臭くなかった。二郎は日曜日はアヒルの世話だ。相変わらず店先や裏庭でアヒルとお楽しみだ。平たい口嘴をパクパク音をたてて泳ぐ姿が可愛い。

アヒルの成長は早い、とうとう図体のデカイ成鳥になった。浴槽に入れても小さすぎる、持て余し気味になった。

大槌の梅田橋から上流に、アヒルを梅田川に放し飼いにしている家がある。我が家の近くにも流川があつたらアヒルを飼つて楽しみたいなど、通る度に思っていた。妻の生家で以前アヒルを飼っていたと云う。今は田圃になつているが、庭先は川だった。大きな水車がありコンニャク粉を生産するため、杵が二十四本、石の臼に水車が一回転する度に時間差をつけ粉を搗く。許婚時代前の思い出である。

二郎のアヒルは、とうとう飼いきれず矢附の常世チャンに飼つて貰う事にした。水車は取り壊して、川幅の広い緩やかな流れになつていた。貰われて行ったアヒルは家の脇に作つて貰つた小屋で、大事にされていた。

毎朝アヒルは小屋を出て、ガアガア独得な鳴き声を出しお尻ふりふりユックリ川に行く。その格好を想像するとき一人でニヤケテしまう。

アヒルは川で一日を過ごし、夕方小屋に帰ってくる。そんな事が何日か過ぎたある夜、狐に襲われ、狐の餌になつてしまった。常世は涙を出して泣いたと、両親から話を聞いた。アヒルにまつわる、エピソードである。